この人に聞く　赤井 純治さん

「新潟を日本一折り鶴のあふれる街に」

◆略歴
1947年　島根県松江市に生まれる
1970年　京都大学理学部地質学鉱物学科卒業
1975年　京都大学大学院理学研究科博士課程、単位修得退学
1975年　新潟大学理学部助手
2000年　新潟大学理学部教授（鉱物学、地球科学）
2013年　新潟大学名誉教授〈2002年　日本鉱物学会賞受賞〉

最新刊　電子顕微鏡鉱物学からバイオ・地球史鉱物学へ　―鉱物版「科学運動」論と哲学―　2021（発行 地学団体研究会:メール ja86311akai@gmail.com へ申し込めば、送料込み 900円）『地球を見つめる「平和学」』、新日本出版社、2014

編　集　部

最新の自著について
――ここに全て書いたつもりで

この本（地学団体研究会「電子顕微鏡鉱物学からバイオ・地球史鉱物学へ―鉱物版「科学運動」論と哲学―」）に、今考えていること、ほとんど書いた感じです。

地団研（地学団体研究会）という学会があり、「独創的な研究をしよう」ということと、「その成果は市民に返そう」という普及啓蒙活動、「だれでも研究ができるような条件、また民主主義・平和も大事でその社会活動など」の条件づくりをしようという3点を掲げています。これを三位一体の活動と呼んで、今まで73年間続いています。今の科学者会議にも似ていますが、独自に専門の研究活動もきちんと位置付けてやっているところに特色があります。私はその姿勢に賛同して今までやってきました。

そのことは地学だけでなく、他の分野でもそういうふうになるべきだし、個人の研究の姿勢としても、そうすべきでは、ということを書いています。私も、科研費など、税金を投入してもらい、研究もやってこれたので、その成果、長年やって何がわかったのか等、

少しまとめて国民にもお返しておく義務もあろうかと、この本にまとめたものです。

科学運動とは

地団研でやっているのは「科学運動」、私の専門は鉱物学なので鉱物学版の「科学運動」というつもりでこの本の副題につけています。哲学に関心が強かったもので、私なりに勉強したものを、哲学がどう役立つか、経験をもとに書いています。

第1部のところが専門のこと、第2部が哲学と科学運動論、大学教育ということも含めて書いています。いま若者・青年をどう育てるかということが諸分野で緊急の課題ですが、その点で、大学の教養科目の「平和を考える」という講義も四半世紀やってきて、そこでさまざまな経験もありました。学生に共鳴を得たことなどを中心に今の現代の若者論・学生論も書いています。私はすこし刺激的にも話すと、感想では、「自分ら若い世代が行動しなくては」とか、言うけれど、実際足を踏み出す学生は非常に少ない。けれど、ニューヨークへ行こうという学生が何人か、時々出てきたりします。私は「学生も一人のちいさな知識人」であってほしいとか、言うと、納得する、その通りという学生もかなりいます。しかし時間がたつとまわりの雰囲気にそまって、いつもの日常性にもどっていきますが、そこのところをどう継続して考えてもらうか、そこが大事なのです。

教育論・学生論

教育論でいうと、10年ほど前に亡くなられた吉村尚久先生がおられて、彼は、古武士的な風格を持っていて、原則的でもあり、また学生を叱るわけですね。けれども同時に、非常に学生を愛しているというか、学生のなかに入って行って面倒をみる、学生と同じような気分で飲み会をやったり、あるいは、幼稚園、保育園の先生みたいな気持ちといいますか、「何々くん、何々ちゃん」というような、そういうふうに子どもを見る目、愛するスタンス、それを持っていて、且つ叱る。そうでないと叱るだけだと逃げて行ってしまいます、それを、私もなんとか同じようにできないかなということでやってきたつもりもあって、そういう教育論、青年論も書いてあります。それと哲学。私自身大学1年のときに弁証法的唯物論にふれました。その時、

個人の問題と思っていたのが、社会の問題が丸ごとに背景にあるのだと。人間の本質は何かというと、社会的関係の総体であるということ、自分自身の意識だと思っていても、いろんな考え方も、いわば社会全体が凝縮されているというふうに見るのが正しいということ、に気づかされたのがきっかけです。それ以降ずっと揺らいでないかなと思います。

後でまたふれますが、やはり基本は、市民が賢くなることが最も重要、そうでないと社会は変わらないというのがひとつの結論です。いろんなサークルや勉強会の場がもっと無数にあるべきですし、昔は労働者教育協会とかもっと活発であったと思いますが、そこらがまだ今弱いのではないかという感じがしています。

原水爆禁止運動に取り組むことになったいきさつ

条件づくりということが、平和とか、民主主義を守ることに関わります。この本で、核兵器廃絶、軍学共同反対、核のゴミ処分問題、学術会議任命拒否事件、その他を書いています。

私の学生時代は66年から75年ですが、大学紛争世代です。大学民主化とか、ベトナム戦争反対運動もありました。平和にも強い関心はありましたけれども、特に核廃絶とかには取り組んでいませんでした。１９７５年末に新潟大学に赴任し、翌年に組合から広島の世界大会に行けと言われて、行った訳です。そこで、大変刺激を受け感激しました。その後、何にもしていなかったのですが、組合で理学部の組合の書記長をやっていた時、ちょうどヒロシマ・ナガサキからのアピール署名、１９８５年スタート。そのとき全国的に大きな雰囲気があって、自治体単位で過半数を達成しようと。少し署名をやっていたら私も、50集まって、「あ、これいけるな」と思って１００、３００集まって。組合の新聞が理学部分会の赤井さんが３００集めた、すごいとニュースに書かれて。５００、「あ、これは１０００いけるぞ」と思って１０００、それで調子にのって２０００、３０００。もっと新しい工夫をしようと町内会やお寺へ行って申し込みとか、次々集めていったら、ヒロシマ・ナガサキアピール、約10年間続きまして、全国で６０００万集まったのですけれども、私は１万２０００筆以上は集め、新潟市過半数達成にも貢献しました。

加村崇雄先生が先日、亡くなられました。心から哀悼の意を表したいと思います。私が退職の年２０１３年、理事の末席にいたのですけれども、その時には加村さんはかなり体力も弱っておられ、原水協の代表理事を引き受けることになりました。

新潟大学と核廃絶
・軍学共同反対への取り組み

新潟大学はこの本（『地球を見つめる「平和学」』、新日本出版社、２０１４）に書いてありますが、開学のときから横田伊佐秋先生がレッドパージ、イールズ事件で首を馘られそうになる、学生が血判状を書いて抗議するとかあって、それが新潟大の平和への取り組みの一つの原点でもあるのではないか、と思います。ＳＤⅢは１９８８年。私が、代表として国連要請に行きました。ちょうどその年に新潟大学非核平和宣言を制定、新潟市でヒロシマ・ナガサキからのアピール署名、過半数達成の年です。２０１４年、３月８日付、読売新聞に、今度防衛装備庁が大学と緊密に連携する組織をつくるということが報じられました。その軍学共同の動きを見て、非核平和宣言をやっている新潟大学として、これを黙っておれないということで、私が全国の学者研究者の交流集会で最初に、署名をやろうと呼び掛け、軍学共同反対の署名運動をはじめました。さらに池内了先生に代表になってもらい、軍学共同反対連絡会もできて、なりゆき上私が事務局長をやって、学術会議に働きかけ、２０１７年にこれまでの軍事研究反対の見解を継承する旨の新声明を出させることができました。

核兵器廃絶は極めて簡単

核兵器廃絶課題について、一番重要な結論から先に言うと、核兵器廃絶というのは極めて簡単なことなのです。どうしてか？　あまりにも大きな破壊力。あまりにも残虐・非人道的なこと。これを知ればいいのです。我々が理解すると同時に、世界全体が理解すればいい。何か分析するとか、研究して解明すべき課題なんてあまりない。ある意味、啓蒙・普及だけなのです。原因不明、治療法の不明の病気がまだ世界にはありますが、それらの方がある意味で難しい課題。核廃絶は難しい、難しいと言わなくていいのです。例えばかんたんな一例を想像すればいいのです。つまりどこかで、

核兵器事故が起こった場合、大規模核戦争、あるいは中規模・小規模核事故かもしれません。そしたら、世界の反核平和世論が急激に盛り上がります。日本は、ゼネストもやったらいいと思う。即廃絶という世論形成はできます。

核廃絶課題での新潟の位置
～一般性を捉える

それから新潟の位置ということをもう一つ、強調したいと思います。広島・長崎が象徴的で「広島・長崎に折り鶴を届けよう」「広島長崎の被爆者の人はたいへん」と言うのだけでなくて、新潟にも落とされる恐れがあった、4目標の一つだった。広島・長崎・小倉がずっと曇りだったら、1発目は新潟だったかもしれない。ということは原爆投下の非人道性の一般的な問題を示唆しているわけです。人類に対し、無辜の市民、どこの都市でもいいから落としたという、その犯罪性を理解するカギのひとつがここ新潟なのです。新潟はヒロシマ・ナガサキからのアピール署名が人口の過半数23万8千に1988年達成しています。これは県都では3番目。その中で私は、実質的な事務局長役でした。

「市民が賢くなる」ことが
何より必要・最大の課題

一番は「市民が賢くなる」ということがないとまずいと思います。選挙で勝つか負けるかといったことだけでなく、もっと本質的に「賢くなる」ということがないといけない。それは教育の場でいえば学生などは、時間があるから、勉強してほしい、一に学べ、二に学べ、三に学べ、と私は講義の中で言っています。

核兵器、人類史のなかでとらえるということが大事ではないか。人類が科学をはじめて2千年も経っていません。けれども、その間に急激に進歩して人新世の時代、ちょうど20世紀前半は、原子核物理、原子の構造がわかってくるのと全く並行して、ナチスとヒトラーが出てくる時期と重なった歴史の偶然がありました。そこに日本の軍国主義がかかわって、さらに広島・長崎に対して大きな破壊力が使われてしまったという偶然と運命。その運命を背負ってしまったのが日本です。今度はそれを発信すべき使命・義務となっていると思います。

核兵器禁止条約は、ポストコロナのいわばスタートです。一言で言って、核兵器の国際的違法性が確定したということが非常におおきいですね。威嚇も禁止された。市民が世界を動かしたということが非常に大きい意義と思います。

そういう意味で運動してきた人は1月22日は歓喜して、新潟では折り鶴を大きく飾って祝いました。禁止条約はちょうど半分のところです。完全廃絶が最終ゴールだから折り返し地点。広島・長崎は東日本大震災のいわば10倍１００倍位ですが、津波はあれがほぼ最大。核兵器の威力はどんどん大きくなる、個数で全破壊力を考えると、ほんとに人類を滅亡させる力をもっている。たぶん核戦争が起こる可能性は、希望的観測にすがって０・００００１％くらいというふうにみんな思いたがっている。けれど、そうかもしれないし、１％かもしれない。誰もわからない、確かなのは０でないということです。津波は自然現象ですが、核兵器は人間が作り、使うものですから、なくそうと思えばすぐにもなくせます。そのことに気がつけば、それこそ世界中で一斉ゼネストでもしてですね、各国政府を動かせばいいです。

どんなにひどい状況になるかは、核の冬のことをこの本（地球を見つめる「平和学」）のなかに紹介してますが、現在の人口にしてみれば、30億、40億人の被害です。そういうことをふくめて「知る」、「市民が賢くなる」が、一番大事です。

広島長崎のもたらしたものはなにかというと派生して、憲法9条を生み出した。この副産物がありました。もう一つは、この破壊力をアメリカが政治利用をし、ソ連も同じようにこれを政治の道具に使って、核軍拡競争に入って行く。

核の傘・核抑止論を打ち破る課題

そこで言われるのが、核の傘・核抑止力論。これがまことしやかに言われるけれども、全く間違っている：撃ち合いをやったら勝者も敗者もない。また核抑止というのは「攻撃するなら核でやっつけるぞ」という即発射の準備をしているということです。実際使うということ。被爆国日本が、違法な核を使うということは、脅しであっても許されないということです。禁止条約で一層明確になりました。

では中国北朝鮮の脅威をどうするのかと言われます、

別の解決方法しかないでしょう。圧倒的国民的な世論をバックに9条を押したてて、国際世論として包囲する、外交の力しかないだろうと思います。

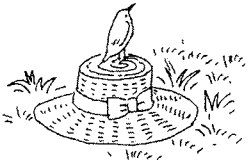
新潟でこれから義務的になすべきことと夢

新潟の位置ということに触れましたけど、2回ほど折り鶴での良い経験があります。昨年の8月の新潟平和の波行動のときにも折り鶴を付けたアドバルーンをあげました。また、西区で、小学生の女の子二人が、ドアに飾ってある折り鶴について、ピンポンを押して聞いてきた。「核の字まだ習ってないけどどう読むの」「七夕終わったのにどうして折り鶴が飾ってあるの」と。そこで家の人が広島長崎について話し、小学生が「わかった」と。そういうことで地域で話題がひろがったということがありましたし、今年の1月22日の新潟平和の波行動のときもまた飾ろうということで、飾りましたけれども、私が言い出したので町内で折り鶴飾ってくださいということで言ってまわったんですね。そうしたら、向こう三軒まではいかなかったけれど向こう一軒両隣で飾ってくれました。全部で13軒。場所によって、この人のところでは、このような話はあまり話せないなと思ってたところもあたってみると、快く飾ってくれたところも。新潟平和の波行動では、1月22日は、実質国民の祝日に位置付けて、と発信しました。折り鶴作りは簡単ですし、1月22日これは、被爆国であるし、国民の祝日的意味があるとして、祝日ならば飾って当然でしょう。そういう私の気構えでいったら案外すんなりやってくれました。30センチ大くらいの折り鶴をメッセージカードをつけて3軒連続して飾ってくれた所も。自分でチラシを作って、配ってくれたり。今まで何も活動してなかった人も折り鶴ぐらいだったら、動いてくれる可能性がありますし、実際動いてくれました。また積極的な人は、1mの折り鶴を2つ家に飾った人もいた。これをやろうということは、いま1000万人、2000万人との対話、そことダブると思います。これが市民が賢くなることにつながります。行動への一歩になります。折り鶴だったら気楽に話せます。そこで話が弾めばもうすこし踏み込んで、政治の話だとか政党の話とか話せるんじゃないかということで、それを今年の原水協の方針に掲げようとしています。3・1ビキニデー集会がありましたけれども、この新潟の取り組みを、国内での取り組

みの一番最後のところ、トリとして紹介させてもらいました。

新潟としては、目標4都市ということもあるし、日本一折り鶴にあふれた街にしようと大きく目標をたてています。つまりヒロシマ・ナガサキアピールのときは過半数という大きな目標があったからみんな大志を持って取り組めた。日本一折り鶴にあふれた街にしようということ、新潟県レベルで押し出したら、そういう雰囲気ができるのではないか。国民の祝日的な意味合い、核兵器廃絶は被爆国にとって当然なのだというのを雰囲気的に地域に定着させてしまおうと。連合政権で核兵器禁止条約参加、批准といわれていますが、世論的な支えがないと難しいところがあると思うのです。その核廃絶世論は、折り鶴にあふれる国民の祝日的に、被爆国としては当然だ、という雰囲気を全体につくってしまうということ、新潟からそれを発信しようかなと、少し大きな構えでいるということですね。

2つの可能性、いずれが早いかの競争

ですから、核兵器廃絶は、簡単なことなのだけれども、偶然で核兵器が暴発する可能性ももう一方であるので、そのいずれかの競争だと思います。なにが起こるかわからない。2年前はコロナが起こるなんて誰も考えていない。20年前に大震災と原発事故が本当に起こる可能性を、ほとんどの人は考えていなかった。核兵器事故がそういう形で起こらないとは限らない。あとはどう急速に啓蒙してみんなが知るか、その速度の競争だと思うのです。ポストコロナ の地平を今開くか、人類が滅亡に近い打撃を受けるか。そのなかでの、新潟としてのがんばりどころとしては上にのべたような方向で、夢を持って取り組みたいと考えたいと思います。

（文責・編集部）